

表現87 目次

静かなお昼流星群	小金井ささら	0
彼女はぼてぼて歩くのだ。	全自動執筆者	0
咲かない桜	小金井ささら	1
ランダマイズ症候群	小金井ささら	1
オンリーワン・シヨット	八咫烏	1
ボール	小金井ささら	2
塵も積もれば不条理と為す	小金井ささら	2
生の目的、死の理由	新道知樹	3
人参百本三十円	小金井ささら	4
俺達はモテない	日高吞	4
Math.sqrt(7)	小金井ささら	5
はしばまれる視界	喜多宮枕	5
編集後記		9
奥付		9

静かなお昼流星群

小金井ささら

空はまだ青い。南西には太陽。だけどそこに流れ星がひとつ。

僕は見つけて声を出す。

「あ、流れ星」

友は必死にお願いしている。

だけどその言葉は聞き取れない。

「願い事は落ちた場所の言葉で言わないと効果が無いんだよ」

そんなの聞いたことが無い。

空はまだ青い。南西には太陽。

そこに流れ星がふたつ、みつつ。

僕は撫でるように手を差し出す。

友は掴むように手を差し出す。

「流れ星を捕まえたつもりになると、願いを叶えられそうな気がしてくるね」

実際に捕まえたなら間違いなく火傷する。

空はまだ青い。南西には太陽。

そこに流れ星が、たくさん。

僕は見つけて声を出す。

「流星のシャワーだね」

友は願いののちに声を出す。

「シャワーというよりむしろ滝でしょ」
願いの数だけ見えるらしい。

友のツインテールがびよこんとはねる。

「あ、うしろ！」

僕は一人で回れ右。

僕らの背後にあったもの。

それは数多の流星群。

無音で流れる流星群。

友は願いをやめていた。

「ひとつだけ、お願いがあるの」

「誰に？」

「……あなたに」

空はまだまだ青いのに、

彼女の頬だけが夕暮れだった。

僕と彼女の流星群。

静かなお昼流星群。

■3時のおやつは9ボルト。

彼女はぼてぼて歩くのだ。

全自動執筆器

■Chapter 1 Sahnmoi Island

男たちが列をなして歩いてくる。

サモイの朝ははやい。赤道直下のこの島の主産業は漁業であり今日も男たちが丸木舟に乗って勇ましく浜辺を離れるのだ。今年是一年に一度の海の神に祈る祭りの日。普段はなかなかとることが出来ない大きなイカを捕まえるべく漁の前に火を取り囲んでサモイの全ての住民が一晩中踊り明かすのだ。宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家、走り回る子供たち。南国の風。そのどれもがこのサモイの神によって与えられたものでありサモイをサモイたらしめるゆえんである。

十八歳のククルはこの季節の太鼓の音を聞くと急に憂鬱な雲が眼前にかかり始める。砂浜を走り回る少女は多分妹だ。腹違いではあるが彼と一緒に育てられた妹。みな黒髪がこの集落において金髪の彼女はとても目を引いた。風の噂によれば母がこの近くの町に来たとある宗教の伝道師との間に作った子供だとか。自分の父は既に漁に出たまま行方不明になっているし母はこのあたりで頼れる人間も居なかった。さびしくなるのは当然だと思ふ。でも、このあたりの話は母は口をつぐんでいたので真偽のほどは定かではない。知ることは出来ないし知りたくも無い。彼の心にわだかまるのはあの日、祭りのちょうど前の日、近くの島からやってきたという男たちによって連れ去られていく妹。異形の金髪として集落の人々に恐れられていたから多分誰かが手助けをしていたんだと思う。でも結局彼にはどうすることも出来ない。

ただ祭りの太鼓の音を聞いているしかないのだ。宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家、走り回る子供たちを眺めながら。

■Chapter 2 Yakushiba City in Japan.

くるくると回るメーターを横目に交流9ボルトを飲み干すと背中にスパーク。今日も快調。営業スマイル。

「美味しいお菓子がいっぱい夢いっぱい グレートプレーリー製菓をどうぞよろしく」

今日の最高気温は三十五度。夕方から雨。

トラックの中から私と同じ容姿の同僚たちが充電を終わらせて出てくる。

整列してラジオ体操。おはようございます。そしてさんさんばらばらに担当の地区へ歩いていく。私の担当は天神様の裏参道。

「グレートプレーリー製菓のおいしいお菓子を販売中ですよ」

「グレートプレーリー製菓のおいしいお菓子を販売中ですよ」

「現在袋についているシールを集めると抽選でシベリヤツアーにご招待！」

「真夏の流水キャンペーン開催中！」

アンドロイドだからといったってキャッチコピーは自分で覚えなきゃいけないんだ。ポケットからカンニングペーパーを取り出してそらんじながら歩く。

遅ればせながら自己紹介をさせていただくと私は自動販売機、グレートプレーリー製菓日本支社に所属する識別番号「ch103271」だ。

でも歴史博物館の暗いショウケースにおいてある前世紀の大きな四角い鉄の箱じゃない。お菓子の販売機能に特化したアンドロイド、というのが正しい説明。人にやさしい自動販売機。老若男女が親しみやすいように小さな子供の外観、アメリカ資本のグレートプレーリー製菓らしく金髪碧眼、さわやかな白いワンピース、飲み物を入れた不似合いな大きさのメッセン

ジャーバッグ。みんな共通のファクションで飛び出す。

本社は私たちのことを百パーセント人工で安心のアンドロイドだと公表してるけど私が思うに私たちは貧しい国から買われてきた子供をオリジナルにしてマインドマップを配列してる……といったところだろう。だって本当に全部人工なら私は四六時中お菓子をたくさん売る方法しか考えていないことになる。

でもわたしは色々なことを考えていた。月まで続く階段のこと、世界の果てのこと、成長して大人になるということ、直流電気は美味しいのかということ。ときどきそういう難問を扱っていると頭の中がショートすることがある。

「ああ頭が」

そうするときどき見たこともない景色が頭の中でシャッフルされたりする。宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家、走り回る子供たち。南国の風。たぶんこれは私たちのオリジナル、名も知らぬ子供の記憶。

きゆるきゆるとメモリディスクを回転させながら溶けるような歩道を歩いていく。一緒に歩いてきた同僚たちの列から離れて裏の路地へ入っていく。ここから天神様の山を後ろに回りこんで担当の裏参道へ。

参道、とくつても同僚の「ch180-77」が担当する表参道とは違って裏参道は日のあたらないダウンタウンに続いている。しかもこのあたりは大学生が多いので昼間はほとんど話しかけてくれる人が居ない。けったいなところだ。

聞いたところによると人工知能を搭載しているところという環境によって性格が変わってくるらしい。私は考えたこともなかったが例えば先の「ch180-77」は表参道で信心深い老人の相手ばかりしているからとてもしとやかな印象を身にまといている。それに比べて私は近所の大学の関係者（しかもむさい男どもだ）の相手ばかりしているので標準より言動が荒っぽいらしい。

そんなことをいったら大学の敷地内を担当する「ch114-54」なですでに自動販売機の範疇ではないと思う。私が口に出せない言葉まで彼女は平気

で話すので大学側からベンダーの交代が要請されているぐらいだ。

「あーっ、畜生。また管理組合から厳重注意をうけちゃったよお」

「それはお前がそんなことをやってるからだよ」

「あのくそじじいどもめ。残り少ない毛根を全部引っこ抜いてやろうか、この■■■■野郎」

もう接客担当の台詞ではない。もちろん平時はオートモードになっているので実に丁寧な音声ファイルが本人の意思とは反対に再生されているから営業に支障は無いのだがいざマニュアルモードになると素の彼女が露出するのだ。

それがどこかのネットで有名になったのかベンダーの愛好家ときどき「特攻ベンダー隊長」の「ch114-54」と「特攻ベンダー副長」の私を訪ねてこんな田舎町までやってくる。なにが「特攻ベンダー副長」だ。失せる。消えてしまえ。原子にもどれ。

毒つきながら私はブロック塀の前に座った。ここが今日の私の商売場所。まだ朝なので通学する学生が何人か目の前を通って。

「美味しいお菓子がいっぱい夢いっぱい グレートプレーリー製菓をどうぞよろしく」

力いっぱい営業スマイル。でも製造過程の事故で人工筋肉がゆるんでしまった私はどうがんばってもひきつった笑みしかできないのだ。仕方なく白いワンピースに今夏発売の新商品のコマージュをちかちかと投影する。私の口をスピーカーモードに設定してメモリ通りの宣伝文句を自動再生させる。私がわざわざ無い頭を絞って接客なんてしなくていいのだ。

「ミニヌードル海鮮味を一個」

早速新商品をサラリーマンが買っていった。今日は幸先がいい。もしかすると今日は営業成績のワーストランキングから脱することができるかもしれない。

そんなことを考えながら相変わらずコマージュを流しているとまた一人男が歩いてきた。

「美味しいお菓子がいっぱい夢いっぱい グレートプレーリー製菓をどうぞ

ぞよろしく」

「いや、僕は客ではないよ」

「うがはやくか男は一眼レフを取り出して私の撮影をした。とっさのことだったので私も笑顔を作る暇も無く目玉をひんむいたホラー映画みたいな顔になってしまった。そいつは白衣を着て針金のようにやせている。くるくると私の四方を回って観察していた。」

「あれだけ話題になるだけあるな。やっぱり君は客に敵意を発散していて人にものを売ろうという気持ちがあったか無い。すばらしい！」

販売以外のときにはオートモードが使えずマインドマップに電流を走らせながらAIで会話しなければならなくなる。面倒くさい。マニュアルだと私の口の悪さが露見してしまうから。でもこの男はそれが見たくて私に会いに来たクチだったかしらん。

「うん。元来女の子というのはだね、おしとやかにあるべきっていうのが僕の哲学なんだ。うん。そう、砂糖菓子のように脆く切ない存在ならなおよい。だから決して君みたいに乱暴な言葉を使つてはいけないんだ。せつかくそんなかわい外見なんだから。表参道や大通りの同僚をみないなさい」

殴り飛ばしてやろうか。彼は長い髪の毛を振り乱しながら声高に演説する。彼曰く近所の大学に勤めるそこそこ有名な教授らしいのだがどうしたことか。だって日本全国のベンダーの写真を集めるのが趣味なんて、そんな輩が人にモノを教えるなんて。この世も終わりだ。次の世の中はイカとベンダーが支配する世の中だろうね！彼は最後に恒例の儀式がある、といった。

「うん決めた。君の名前はハニービーだ」

「ハニービー？」

「そう。君の名前。僕は出会ったベンダーに一人ひとり名前をつけているんだ」

それだけというと彼は「記念に」といってスナックを注文した。1袋十円の一番安い商品。金を落とさない客に用はない。ひきつった笑顔で教授を送

る。でもなぜだか知らないけど自分に名前がついたということが意味もななくうれしかった。今まで識別番号だけで十分だったのになんだか私という存在が認められた気がした。思えば上がりもはなはだしい。

「ハニービーですか」

「これはどういう意味なんだよ」

「たぶん蜜蜂、みたいな意味だと思います」

帰り道に「ch180-77」はそう解説してくれた。あの男は「ch180-77」のところにも現れたらしく「ピンクハート」という名前をつけていったそう。

最初に聞いたときはなんだかセンスが安っぽくて噴き出してしまったが彼女いわく

「いいえ、pinkには『撫子』の意味もあります。たぶんそちらでしょう」
「撫子……」

「私はただのアンドロイドですのに。大和撫子っていうのは自分の損得で動く人間ではないはずです。私はビジネスにしか興味はありませんし」
そして見本の営業スマイル。彼女が支社の中でも一、二位を争う営業成績を残している理由がわかった。完全無欠の販売員。こういうときの立ち姿もプログラムに記録されているモデルのようなポーズそのままだ。

「そんな、ch103-27……じゃなくてハニービーにはいいところがあるじゃないですか」

「例えば？」

「営業にはアグレッシブさが必要なんです。そう考えるとわたしはマニュアルどおりの仕事はできませんがそれ以上はできません。積極的なハニービーを見ていると羨ましくなりますよ」

「でもお前のほうが成績はいいよな」

「……今だけです。今だけ」

こういう人をほめる台詞も最初からプログラミングされてるんだらうと考えながら歩く。むなしい。もともと同じ製品だったので私の場合そのプログラムはどこに置き忘れてきてしまったというんだらうか。バイオシナプ

スが悲鳴を上げる。

「名前というのは自分を他と区別するということなんだ」

「だからどうした」

昼時に教授がまたスナックを買いに来た。

「つまりきみたちにも人格が形成されてきたということだよ、おめでと〜」

「もっとわかりやすく話せ馬鹿」

「まだ君にはわからなくていいのさ」

彼が買っていくお菓子は細長いグミで毒々しい色をしている。彼はそのはしっこを加えるとまるで麵を食べるように飲み込んだ。気色悪い。指摘するべくけけと怪しげに笑う。

「たしかにピンクハートちゃんは営業成績はいいだろう」

「もちろん」

「でもそれは自動販売機としての優秀さだ」

「自動販売機としての？」

話が長くなりそうだったので近くの公衆コンセントに背中プラグを差し込んで充電を始める。省エネモード。環境にもやさしい自動販売機。

「僕はね、すべてのアンドロイドは人格を持つべきだと思うんだ」

「私・一応・AI・搭載・してる・けど」

「いや、君たちのAIは販売に特化しているだけ。そこに君は後天的に自らの性格を書き加えたんだ。これを成長という」

成長、は私がどうがんばっても意味のわからない言葉の一つだった。メモリに書き込む。

「つまりピンクハートちゃんよりも君のほうが数段上を進んでいるということだよ。営業成績なんて考えちゃいけない。君が君らしいことが一番なのさ」

「はあ・別に・私・どうでも・いい・けど」

この男はどれだけ話せば気が済むのか。

「まあその第一歩が名前をつける、ということなのさ」

「へえ・気色悪い・な・と・思っていた・ところだった・けど・な」

「とんだ言い草だね」

狐のような笑みを浮かべる男だった。こいつの目的はなんなんだ。

暗くなつて私の仕事は終わった。深夜はセキュリティが強化されている

「sch217-88」が担当に入る。営業所でバトンタッチ。

「あとはよろしくな」

「わかりました」

「sch217-88」もまだまだ新製はややなので口調は固い。

「あ、そうでした」

「なんだよ」

「あの昼ソフトに入っているベンダーは今日の二十時から営業所でミーティングがあるそうですよ」

「了解。ああめんどくせえ」

ガス灯に照らされる彼女の金髪を見送った。私もそろそろ髪の毛がくすんできた。しかも夏なのにロングヘア。さすがに暑い。次の「検診」のときにウィングをポップカットの新品に取り替えてもらおう。ついでにメッセンジャーバッグのクローラーのききがいまいちなのでこれも新品に取り替えてもらおう。でも「検診」があるのは一ヶ月も先だった。

「ええ」「であるからして」「かさねて」「それゆえに」

集会はいつものように冗長に続いている。ベンダーはみんな社内ウェブでつながっているんだからそこから伝達事項をダウンロードするようにすればいいのにここの課長はよほど演壇に立つのが好きらしいのだ。人間のやることは解せぬ。どうせここにいるベンダーの五割は今スリープモードで電力を節約しているんだらうし四割は話を適当に聞きながら売り上げカードの記入に勤しんでいることだらう一割は課長の物まねをするために真剣に映像を録画しているやつとか。私はスリープモードにしていた。だから気づかなかった。

些細な変化を読み取ることが出来なかった。

■Chapter 3 In your mind

アンドロイドは宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家と走り回る子供たちと南国の風などその他もろもろの夢を見るのでしょうか？

■Chapter 4

やっと私たちは解放されてそれぞれの「寝床」へ向かった。壁のコンセントにプラグをさす。ちょうどいつも使っている壁際が空いていなかったのでもちようど真ん中あたりに座っている。ふと隣を見ると「ch114-54」が座っていた。そういえば今日の昼過ぎに検診を終えて帰ってきていたときかきいていた。私がのどから手が出るほどほしい新品のボブカットのウィッグを携えて。

「やあ、今日はお疲れ様」

「……」

ゆっくりと首を回して「ch114-54」は黙ってこちらを見る。

「あれ、お前オートモード切っていないみたいよ」

「……いいえ、私はマニュアルモードです」

あの私を凌駕する口の悪さの持ち主がこんなにも無口なはずが無い。疲れしているんだろう。

「いいえ。私は検診が終了したばかりです。それよりも今は充電時間です。

あなたも無駄にディスプレイを回している暇があったら早く寝なさい」

それだけというと彼女はそのまま目を閉じてまっすぐの姿勢のまま眠りについてしまった。まだまだ「寝床」はあちこちで無駄話をするこえがきこえている。ピンクハートもまた起きてきているぐらいだ。無駄話の帝王だった

「ch114-54」にどんな心境の変化があったんだろう。私はしゃべっていた時の映像を取り出して頭の中で再生してみた。

そしてすぐに違和感を覚えた。静寂だ。彼女には私たちがAIを起動させ

ているとき特有の電磁波が感じられなかったんだ。つまり今の彼女にはなんらかの理由でAIが存在しない。それがどういう意味かはわからない。怖くなった私はコードが伸びる限界まで歩いて行ってピンクハートをつついた。

「知らないんですか」

もう噂になってますよ、と彼女は続ける。

「私たちは考えすぎるようになってしまいました」

「考える？」

「よく考えてください。歴史博物館に置いてあった鉄の箱の自動販売機たちは徹夜で無駄話をしますか、客に毒づきますか」

新製配備されたベンダーは研修と称して本社の施設内にある博物館で自動販売機の歴史を学習させられる。その展示室の奥にひっそりと白と赤の鉄の箱が恭しく収蔵されている。

「私たちはただお菓子や飲み物を売り歩いていけばよかったです。人工知能なんかはおまけだったんですね。あくまで接客の範囲で使えればいい、といったような」

「じゃあお前みたいなのがベンダーの本来あるべき姿なのか」

ピンクハートの整った笑顔でならぶ自分たちの姿を想起する。そういうと彼女はふっと笑った。

「少し前の私ならそうだったでしょう。でも最近私もあなたにあてられて

いるんですよ」

「は」

「ほら、これとか」

白いワンピースのポケットからあめが出てくる。淡い緑色に染められたそれは抹茶味。もちろんグレートプリーリー社の商品ではない。

「買い食いしてるんです」

「しかもミカサ食品なんていったらライバル社じゃないか」

「私の体がほしがるんですよ。欲望をとめることはできませんしこの抹茶色

何食わぬ顔で優等生はそれをまた内ポケットにしまつて笑つた。
つまりですね、と前置きしてから

「私みたいな不届き者を駆逐するために本社は検診を受けたベンダーから順次AIを抜き取つてより安価なプログラムを入れたスロットを流し込んでいます。つまりマニュアルモードがなくなつてプログラムどおりにしか動けないオートモードだけが残つたというわけですね」

「じゃあちょうど『ch114-54』もその検診に当たつてあなくなつてるんだな」
「ええ」

正しくは ch114-54 の体を再利用した別の機械だ。彼女の人格はどこかに消え去つてしまつている。

「ああ、じゃあ私の検診は来月だから私がこう見て聞いて感じる事ができるのも来月までつて言うことか」

なんだかそれが自動販売機として当たり前だということはわかっているのに腹の奥のバッテリースペースから急に冷却液が逆流してくるような感じがした。その冷却液はどこかにぽっかりあいた穴に滔々と落ちていく。ピンクハートはそれを聞いて遠い目をした。

「あなたは来月ですか。じゃあ私は一足先にあなたとお別れですね」
あどけない表情で笑う。あ、そういえばそうだった。すっかり忘れていた。

でもそんな唐突なことつてあるんだろうか。

「私は明後日本社から来る車に乗つてもう検診に向かいます。そうならピンクハートはもうこの世から消滅してしまつてでしょう。どうか忘れな

いでいてください」
最後まで彼女は「笑顔Bパターン」で気丈に笑うのだ。

「そんな笑うところじゃないだろうよ」
「いいえ、これで私もより一歩完璧な自動販売機に近づ……」
大粒の涙がこぼれます。しゃくりあげる声。でもその細かい声は喧騒に包まれて誰にも気づかれないまま地下に染み渡つていった。

「ねえ。恥ずかしいから」

しばらくして彼女は顔を上げていった。

「もうかえつて。自動販売機は涙を流しちゃだめなんです」

たとえマニュアルどおりの対応だったとしてもあそこまで徹底し独自の美学へ昇華させられたならば彼女は間違いなく誰がなんと言おうと世界一のベンダーだ。ならば落ちこぼれのベンダーである私が世界一のベンダーに對してできることはなんだろう。敬意をもって。相変わらず彼女は壁に向かつてすすり泣いている。ふうつと息を吐きながら私は敬礼のまねをして寝床へ戻つた。頭のディスクが擦り切れそうなくらい回転している。デッドヒート。

翌朝は雨だった。ぼんやりと歩きながら裏参道へ。朝はなんとかお菓子

を売ることができたけど午後になつたらもう立ち上がる元気もなくなつて冷たい路上に座り込んでしまつた。私が私でいられるのもあと一ヶ月。そう考えると今一瞬でも一秒でも長くものを考えていたくなつて耐水性のカッパをきるのも面倒くさい。ここでこのまま酸性雨にあたりながら錆付いて息絶えるのもそうそう悪いことではないかもしれない。頭の中をかきかえられるぐらいなら。

「そうかそうか、もうそんなことが始まつたか」
雨にぬれている私を見ると教授は黒いかさを差し出した。

「たしかに絶望するのはわかるよ」
「はあ」
「本社の人はわざわざ一自動販売機に人工知能まで搭載した。その功罪で苦しむのは彼らではなくて君たち自身だ。まつたく勝手な話だよね」

「最初からそんなものなければよかつたんだよ」
「まつたくその通りだ」

だがどんな機械にも「遊び」は存在するからね。資料館の箱の自動販売機だつて表現するすべを持たないだけで自我が覚醒していたかもしれない。時々へそを曲げてコインを飲み込んだままうんともすんとも言わない不届き者もいたらしいね。この男はよくもまあ一人で笑つていられるものだ。

でもこの男にも責任の一端はあるはずだ。実際この男が同僚に名前をつけ

て回ったことによつて自我が覚醒したケースも多いのだから。そんな話をしたら

「僕は機械として生きるぐらいならそれぐらいの苦しみを味わえたほうがよっぽど幸せだと思ふんだよね」

つまりこいつは何もかも確信犯だったのだ。たぶん自我を持った機械が不要とされることまで何から何まで予想済みだったのかもしれない。それが僕の仕事さ、と彼はつぶやいた。

「さあ、君たちに危機が迫っている。でも危険を回避するすべは君が十分持っているはずだ。君たちは考えることができるし自分で行動することもできる。自由だ。さあ君ならどうする」

彼は意地悪く笑う。私の頭の中のニューロ管が火花を散らしながら収束しとめどなく演算し続けていた。

「救われぬ人工知能の魂たちに救いを！」
雨がぬらす路地に男の胡散臭い叫びが響く。

翌朝私は始業時間のずっと前に目覚めた。昨日は雨の中裏参道で充電しながら男の話を聞いていたので夜中の充電は短くてすんだから。鼠のようにあたりを見回してからピンクハートに歩み寄った。耳の傍らで静かに名前をよんでみたけれど彼女が目覚める気配は無い。仕方ないので少々手荒だけれど背中のコンセントをひっぱって抜いた。

「ばっ」
突然起こされた彼女は苦しそうに咳き込んだ。逆流が起こっているらしい。

「なんですか」
そこで私は昨日から言わずにおいていたことを吐き出す。

「逃げるんだよ」
「逃げる？」

「ああ。私たちもただ黙って頭の中をいじられるわけにはいかないからな。これから先の世代のベンダーたちに私たちが見て聞いて感じたということを少しでも伝えなきゃいけない」

「それは誰の受け売りですか」
彼女は笑った。

「そんな大義名分はともかくとして、私は前々からこの町の外に行つてみたかったんだよ」

「はあ」
「それに」

私は振り返る。横にはいまだ充電中の「0h11454」のコンセントを静かに抜いた。うつろな瞳の彼女は何を言うでもなく幽鬼のごとく立ち上がる。

「こいつも取り戻しに行かなきゃいけないしな」
「そうですね。たぶん……その……特攻隊長さんの△のバックアップがどこかの独立系データセンターに保管されているかもしれません」

「そうだなあ」
私はあくびをする。

「はぐれベンダーなんかいたらすぐに本社につかまるのは目に見えているけどどこまでいけるか挑戦したいんだ。まあ死に際の無茶だと思つてもらうていい」
「へえ」

そういつたあとしばらく瞳を上下左右にひととおり動かしてから製造番号0h11454、ピンクハートはゆっくりと顔を上げた。

「私もおとします」
始業時間までのこり一時間三十分。まだ時間はあつた。業務用倉庫から予備のバッテリーを持ち出してメッセージバッグの中に入れてだけつめた。

家庭用コンセントと私の充電プラグとのアダプタや簡易修理キット、事務所のカウンターにおいてあつた宴会の積み立て貯金箱、商品一式、地図、

雨カッパ。オフィスにあるものだけでもこれだけ集まった。けつきよくメッセージバッグはバッテリーだけでいっぱいになってしまったのでキヤリーケースを発見してきてそこにつめた。

用意完了。
最後に同僚たちが眠る倉庫にやつてきた。まだ誰も起きていないのでみんな

な一列に首をもたげて眠りこけている。窓から朝日が差し込んで彼女たちの金髪を照らし出した。

「ハニービー、私が思うにトウモロコシ畑とはこんなふうな雰囲気なのではないでしょうか」

「いいや、私はこの風景を小麦畑と見るね」

「でもよく見てみると金星に近いような気もませんか」

「お前は金星を見たことがあるのか」

「いいえ。でもこれから見に行けばいいじゃありませんか」

鉄の扉を閉めて朝もやのかかる町へと飛び出した。さらば営業所、さらば裏参道、さらば愛すべき同僚たち。

「どこを目指しましょう」

「ええとそうだなあ、まず……」

頭に思い浮かんだのはときどき頭を掠めるあのビジョンだった。

「宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家、走り回る子供たち。南国の風」

「宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家、走り回る子供たち。南国の風」

二人で声をそろえていう。やっぱり私たちの故郷はそこらしい。一路南へ。GPSを使って自分の現在地をモニタリングしながらコンパスを回して方向確認。

途中の交差点でむこうから歩いてくる金髪の少女の一人を見つけた。そのまま営業所に戻るのかと思ったら営業所とは反対、つまり私たちと同じく南のほうへ進路を変えた。その中には「sch217-88」もいる。どうやら彼女たちは夜間シフトの一团のようだ。手を振るとあちらもふりかえず。

「どこにいくんだあ」

「宝石みたいな海とそこに突き出た船の上の家え、走り回る子供たちい。」

南国の風え」

みんな声をそろえて答える。国道まで出たときに向こうからまた一团が歩いてきた。今度は金髪に混じって黒い髪で着物を着た少女も混じっていた。

ピンクハート御用達のミカサ食品のベンダー。みんな南へ向かう行列に混じる。そして行列はどんどん長くなっていく。

こうして少女たちによる南への遙かな旅路が始まった。

■Chapter 5 Salmoi Island

祭りの日がやってきた。

朝から鳴り響く太鼓の音に嫌々していた彼は耳をふさいで磯の香りがする部屋で眠ったふりをしていた。どうせ自分も呪われた異形の血が流れているのだ。一人ぐらい祭りに参加しなかつたって誰も気にすることはあるまい。外の歓声が大きくなった。祭りは最高潮に達したらしい。だがその歓声だと思つた声は徐々にフェードアウトしていく。そして静寂。そして堰を切つたように悲鳴があふれ出す。

「帰ってきた」

「帰ってきたんだ」

「バケモノが帰ってきた」

彼は今こそかばの昼下がりに起き上がるのである。

あとがき

私の近所の自販機はみんな関西弁です。なんでやねん。

咲かない桜

小金井ささら

桜が開花していた。一本に数個の花だけど、それでも、春の訪れを知らせるには十分。あと十日もすれば、満開になるだろう。推測だけ。

僕は満足だった。三年間通った学校を卒業して、無事進路も決まって、これから数年間の新たな生活を夢見ていた。だからだろう。浮かれていたんだろう。油断したんだろう。僕は――。

三月十三日のことだった。――卒業式。

泣いてる人がいた。笑っている人もいた。どっちでもない人も、いた。

「どうした、そんなつまらなそうな顔して」

友人は述べる。僕は聞き流すように答える。

「いつ始まるんだ？ この式は」

校長以下みんな談笑という名のおしゃべりに興じている。そのおかげで（そのせいで）、9時30分開始予定のはずが、すでに10時を過ぎていた。

「それもそうだな。談笑なら終わった後ですればいい」
僕は聞き流す。

結局、卒業式は一時間二十分遅れで始まった。

「で、これは何？」

「祝賀パーティーだね」

「へえ」

目の前には高級そうな料理。×10。へえ、こんなあるんだ。食べたことないや。というか、これのお金ってどこから出てるんだらう？

「OBとかOGが出してくれてるらしいから、心配しなくていいみたいだよ」

「そうか。どうやって人の心を読んだ」

「気にするな。はっはっは。」

「気になる。けども面白いやめんどい」

ここまで来てもおしゃべりは続く。たぶん解散は夕方になるんだろうな、とか考えながら、OBとOGの奢りの昼食をのんびり胃に収めた。

三月十四日のことだった。——合格発表。

昼過ぎ、掲示板の前に立つ。たぶん合格しているんだろうなという自信を添えて。もっと早く来ていれば、受かった落ちたの動乱を目の当たりにできたかもしれないけど、興味がないのでパス。

落ち着いて、掲示板を確認する。

「よし、あった」

騒がずに、独り、確認を終えた。

桜が、十輪くらいに増えていた。

余談だが、一か月前に何ももらっていないので、お返しは無し。

三月十五日のことだった。——。

——桜の花びらが、すべて、散っていた。

入学準備。面倒だけど、やらなきゃどうしようもない。だから必要最低限の準備をして、出掛ける。

目的地までの途中、信号待ち。そして、赤い電灯が消え、青に変わる。僕は足を踏み出した。

違和感。何がおかしい？ ……ほかの人が、信号待ちをしていた人が、誰も、誰一人も動いていない。これはおかしい。さすがにおかしい。何故？僕は横断歩道の第一四分点。皆は端点。

クラクションの音。頭だけ右方を向く。そうか。

——トラックが、猛スピードですぐそこまで迫っている——。

信号無視。理解した。だけど、理解が遅かった。いくら学校の勉強なんかの理解ができたって、こういうことの意味が理解できなければ意味がない。なぜならば、きっと僕に明日はないんだから——。

1

気のおもむくままに雲を掴んだら雲は儂く消えていく。日進月歩から計算すると日に進む長さというのは数センチメートルも無い。桜が咲いているのを今年は見えていない。夢を滝が分断した。だからどうした。僕には関係の無い話だ。静かにパソコンを起動させる。モニターの向かいには何がある。何も無い。モニターの手前には何がある。何も無い。僕という存在はモニターに映ることなく揺れ動く。

2

食卓には茶碗が一つ。茶碗には米粒が一万。米粒は水分に浸されることを待たず、ひっそりと暮らしている。米粒たちの衣服は剥がされ、暖房の効いていない湿度の低い食卓でただひっそりと暮らしている。だから僕は容赦なく彼ら（もしくは彼女ら）を口に運ぶ。ただし、硬い。口の中の骨が少し砕けた。淹れたてのコーヒーに白い粉をスプーンで掬って振り掛ける。同時にふりかけを彼女たち（もしくは彼女たち）に振り掛ける。それからコーヒーを啜って、茶碗に水を入れる。Y字マドラーでコーヒーと茶碗を同時に軽く混ぜたら、茶碗だけを連刺電磁にかける。そして現れたのはふつくら米粒。又の名を「ごはん」と称する茶の無い御茶漬。

3

一度限り、使った時点から一分間だけ過去に戻ることが出来る箸をもらった。つまり、今した失敗を無かったこと♪ という訳だ。使い方は二本の箸を同時に両方の鼻に差し込む。だから確かめてみた。箸をもらってから三十秒後、僕は両手に一本ずつの箸を持って、それを鼻の穴に差し込んだ。そして気が付いたら手から箸が消えていた。代わりに三十秒前に箸をくれた人が僕の正面に立っていた。どうもこんにちは。

コーヒーが埃を被っていたから潔く捨てた。そしたらごみ箱とパソコンを間違えたせいでパソコンが壊れた。壊れたパソコンから溢れ出した滝を夢が分断した。そして、水蒸気が液化して雲が発生した。

■天上界

人間の想像をはるか越えた世界。一人の神が頭を抱えていた。

「あれ、こつちだっけ？違うな。こつちか？違う。……おいおい、頼むよ。こつちか！こつちだな！……あうあー」

山ほどあるポケットに手を入れ、彼は何かを探しているようだった。探し物を見つけようとポケットを掘り返すたび、その中の物を外に放り出すものだから、彼の周りの神様は皆一様に顔をしかめていた。今や彼の周りには山が出来、彼の姿すら見えなくなってしまっていた。それをしばらく眺めていた別の神が、とうとう堪え切れなくなったのか、強い語気で彼に言い放った。

「なあ、デス。もうやめにしないか？お前がどんなにポケット裏返しても無い物は無いのさ。もう百年もさがしてるじゃないか。ほら、見てみる。お前が仕事しないせいで、地上の生き物の数がどんどん増えてるぞ。人間も例外じゃない。おかげで他の神がお前を氣遣って、お前の仕事、分担して受け持ってるんだぞ。最高神様も、今は氣付いてないが、もしばれたらお前、神を辞めさせられるどころか、消し去られるぞ」

「どうやら探し物をしているのはデスという名の神であるようだった。彼は忠告を受けて答える。
「あうあー。聞こえない聞こえない。あうあうあー」

デスの口調があまりにふざけたものだったためか、もしくは彼に反省の色が見られなかったためか、デスに忠告を施した神はあからさまな不快を顔に浮かべた。首を左右に振り、重く息を吐く。

「お前がどうしても止めないっていうのなら、俺にも手がある。皆もう我慢の限界だろう。ここまで皆をかき回しておいてにもかかわらずお前が反省していないんだつたら……今さら後悔しても遅いぞ。じゃあな、デス」

「あう……お、おい待てよん！おいつてば！お前まさか俺を最高神の奴に突き出すきか！？なあおい！ふざけて悪かったって！……訳があるんだよ仕事できない訳が！探し物が見つからないとまずいんだって！聞いているのかよー！！」

さしものデスも焦りを浮かべ、先ほどまでのだらだらとした喋り方とはうって変って、長い科白を一息で言いきった。デスの言葉に名を呼ばれた神が足を止める。その顔には怒りよりも呆れが強く表れていた。

「だからさ、お前の探し物ってなんなんだよ。そんなに重要な物なのか？」

「そうさ。あんな物を無くしたなんて事が知れちゃったら、俺はもう終わりだ。……だってあれが無いと俺は一切仕事が……これ以上はまずい。あの女、どこでこの話を聞いているか、分かったもんじゃないからな。じゃあな、俺はもう少し物探しを続ける」

「まだやる気なのですか？」

小さく、しかし威厳をたたえた声が、デスに対して呼びかけた。デスは弾かれたように後ろを向き、そしてそこに、美しい後光を背負った最高

神の存在を認めると、滝のように冷や汗を流し始めた。地上では未曾有の大雨が降った。今までデスと話をしていた神が、その場に跪く。

「さ、最高神様、今日もいいお天気ですね。わ、私はちよつと野暮用がありまして……これにて失礼させて頂きたいのですが……」

「駄目です。あなたは少々勝手が過ぎました。私には分かっていきますよ。あなたの探し物とは『これ』の事でしょうか？」

最高神の手の中にある『それ』とは、金属かなにかで装飾された、黒地の手帳だった。

「あなたの右ポケット、上から数えて六千三百二十三個目に入っていましたよ。あなたはこれを使って、地上の生ある物に、然るべき時がきたら死を与えていたのでしょうか？あなたがこれの場所を忘れた所為で、そこに居る彼をはじめ、多くの者たちはあなたの仕事を慣れないながらも代行してくれていました。……本来であれば、あなたは彼らに申し訳なく思い、一刻も早くこの手帳を探しだそうと努力すべきでした。けれどもあなたは……」

デスは最高神の話をほとんど聞いていなかった。代わりに、といつては変だろうが、彼は酷く悔しがっていた。……右ポケットの六千三百二十三個目って、俺がさつきまで探してたポケットの隣じゃねえか。

「……あなたには罰を与えます。今から地上の時間で数えて七日以内に、五人の人間の命を奪いなさい。あなたの手帳は長らく生ある物の命を吸いとつていなかった所為か、酷く力が弱まっています。地上で言う『リハビリ』のようなものだと考えて、すぐに取りかかりなさい」

デスがはつきりと聞いていたのは、この科白だけだった。……一週間で五つ命を奪うのが、リハビリいかわいい顔してなかなか残酷なことを言うじゃねえか、最高神。

デスは死を司る神だけあり、命を五つ奪うことなど、赤子の手を捨てるより簡単に行う事ができた。故に彼は、どのようにして生ある物から命を奪い去るか、という事より、どのようにこの『リハビリ』を楽しくやるか、ということを考えて始めていたのだった。

最高神の説教が終わり、最高神の前に自分に説教をしていた神に別れを告げた後、デスは本の山から這い出し、天空の穴から地上を覗いていた。

「おお、動いてる動いてる。しっかし、こいつらもまあ飽きずに毎日毎日よくこんだけ歩き回つてられるな。尊敬するぜ。軽蔑もするけど。……さて、どうやって殺そうか。てか、何を殺そうか。……やっぱニンゲンだよなあ。あいつら、面白いし。じゃあ、やっぱりどうやって殺るか、だな」

デスはぶつぶつと呟きながら、黒手帳にびっしりと書き込まれている、今までに殺してきた生ある物の『死因』（彼は先ほどから『殺す』と言っていたが、あくまで彼は死因を決定するだけであり、直接手を下すわけではない。）を眺めていた。ごろごろと転がりながら手帳をめくる作業を十回ほど繰り返したところで彼は手を止め、立ち上がって言った。

「今回は……銃殺にするか。いい事思いついたしな。うん、死因は銃殺に決定っ」と

新たに手帳のページをめくり、彼はそこに『銃殺』の文字を書き記した。その後、彼は無駄な物を取り出し尽くし、数える程しか物が入っていないポケットから地上における銃のような物を五つ取り出し、それになにやら手紙のような物を添え、デスはそれを天空の穴から地上に向かって放り投げた。

「ええと、死亡する人間は……『ランダム』と。これで大丈夫だろう。さて、最高神の言う『リハビリ』とやらも、これで俺のやることは無くなった。あとはゆっくり、人間ども演じる喜劇でも眺めることにするか」

そういつて、デスは再び、天空の穴から地上を覗いていた。

当然この様子を最高神は見ていたのだが、彼女は一度軽く首を振った後、デスに口出しをするようなことはしなかった。日常茶飯事だったからだ。

■人間界へ早瀬守…ハヤセマモル

ひゅーん、と眠くなるような速さの流れ星が夜空を駆けていった。

早瀬守はいつものように体力を落とさないためのジョギングを行っていた。もうすぐ陸上の大きな大会が控えている。今年高校三年の彼にとって、今回の大会が、最後にして最大の大舞台だった。そんな大切な大会にむけてのジョギング中に、彼はのろまな流れ星を見たのだった。

「なんだあれは？」

思わず口に出していた。先ほどのろまな流れ星は、どうやらこの近くに落ちたらしい。さっきのあれはなんだだったというのだ。まさか、UFOなどという物が実在したとでも？切れている息が整うのを待つ。

謎の流れ星（？）が落下したであろう場所に行ってみると、そこにはなにか黒い箱のような物が落ちていた。

「これが、さっきの流れ星、か？この辺りには他に目ぼしい物もないしな……」

ある程度の用心を心がけ、箱を開けてみると、中には映画で出てくるような銃身の長い銃と、その弾と思しき物が一つ、そして漆黒に光る銃とは対照的な、真っ白な紙が入っていた。どうやら手紙のようだったので、広げて読んでみる。

「おめでとうございます。あなた様はこの度、神からのプレゼントに偶然巡り合うという素晴らしい機会に恵まれました。

中に入った銃とその弾がプレゼントに当たる物です。その弾と銃は特別な物で、銃はあなた様以外の人間には不可視となり、銃弾は目標を念じて撃てば必ず命中する代物です。

ただしお気を付けください。目標を強く念じず弾を放てば、弾はあなた様の脳天を正確無比に貫きます。また、この銃を発見してから七日以内に銃を使用頂け無い場合も、弾はあなた様の命を奪います。

ご使用は、計画的に。 死神より」

気味の悪い内容だった。しかし、その手紙には、どことなく人を引き付ける力があるのも確かだった。恐怖よりも先に、不思議と高揚が沸き上がってくる。不可視の銃に、絶対命中の弾丸、だと？中学二年生じゃあるまいし、と小馬鹿にする自分がいる一方で、なんて素晴らしい物を手に入れたのだ！と有頂天になっている自分もいるのだった。……信じがたい事ではあるが。

早瀬守は迷うことなく箱を抱えあげ、真つすぐ自分の家に向かった。今のは自己ベスト更新ではないか、と感じる程のスピードで。

■人間界（高峰理緒：タカミネリオ）

つまらないなあ。心の中で繰り返し続けたその科白を、高峰理緒はようやく口から吐き出す事ができた。大学の友達に連れられ、初めて行った合コンは、酷い有様だった。男も女も皆一緒に自分を良く見せようと躍起になり、何か機会があればすぐ繋がりを作ろうとする。理緒は世間的に見てもかなりの美人であったため、余計に煩わしさを感じていた。トイレに行くときと適当な事を言って抜け出してきたのだった。もう大分遅い時間になってしまった。街の明かりのせいで星が見えない空を見上げ、溜息をついた。

タクシーを捕まえ家に帰ると、一人暮らしのアパートの玄関先に、でん、と黒い箱が置いてあった。一瞬ストーカーの仕業かと身構えた。……以前にもこういった事はあったからだ。けれども不思議と、今までの時のような悪意の気配は感じなかった。

恐る恐る中を開ける。中には銃弾が一つと、それを装填するのである銃、そして真っ白な手紙が入っていた。

手紙の内容は意味が良く分からない物で、幼稚な発想の物語に出てくる武器のような説明が、つらつらと書き記されていた。誰からだろう。……当然、芸名・偽名を覗けば、「死神」などという名字（もしくは名前）の人間が存在するとは思えず、理緒は首を傾げるばかりだった。今までのようにストーカーの仕業だったとしても、こんな物を置いていくはずもない。第一、これが実銃であること自体疑わしかった。ただ、もしも本当にこれが手紙の説明通りの代物だったら（万が一にもあり得ないのだが）、放つておけば自分が危ない。

それに、これが完全無欠の銃であるなら、なにか大きな事に使わなければ損だ。絶対に。理緒は身近な人間、もしくは自分を殺す事に銃を使うとは微塵も思わなかった。

理緒は箱を抱えて部屋に入り、テレビを点けた。たしか今日は生放送で総理大臣の出演する議論番組がやっているはずだ。チャンネルをいくつか回し、目的の番組を見つけると、理緒は先ほどの箱に入っていた銃と弾を取り出し、しばらくの間それを弄くり回していた。

弾の装填が上手くいくと、彼女は次に窓を開けた。冷たい夜風が肌を撫でる。いまだにその性能、そしてその送り主の正体すらわからぬ銃を見つめる。黒い銃身に自分の顔が映り込むと、なんだか映画みたいだと笑ってしまう。……首の向きを変え、テレビを凝視した。総理大臣の顔を強く頭に刻む。そして、再び夜の世界へ顔を向けた瞬間、理緒は既に弾を放っていた。

なんの音もしなかった。え？弾、出たの？と疑問になるぐらい、無音だった。

彼女は素早くテレビに顔を向ける。理緒は思わず声をあげていた。いつもなら決して出さないような黄色い声で、彼女ははしゃいだ。さっきまで血管が破裂するんじゃないだろうかとも思えるほど気合を入れて議論をしていた総理大臣の頭が、血管破裂なんてものじゃないレベ

ルで吹き飛んでいた。少し前に、三百キロのかぼちゃを上空から落とすという馬鹿馬鹿しい番組があったのだが、テレビの中の総理大臣の頭はまさにその時のかぼちゃだった。

素晴らしい興奮だった。今まで、ほとんど何の感動も喜びもなく漫然と日々を過ごしてきた取るに足らない人間の自分が、一国の長たる者を、この手で殺したのだ。テレビから聞こえてくる割れんばかりの喧騒や、この後のこの国の未来なんて理緒にはどうでも良かった。ただただ、今まで灰色だった自分の日々を、鮮やかに彩ってくれた誰かに心から感謝していた。

彼女が後で気付いたことだが、彼女が発砲した瞬間には、もう黒い箱と銃は跡形も無く消え去っていた。

〔現在死亡人数…一人〕

■天上界

「お、もう一人死んだか、やるな、ニンゲンども。しかし、人間界の女にはイカれたのがいるもんだねえ。気を付けたまえよ、人間界の男諸君」
デスは、自分の元に帰ってきた弾丸の血を拭きながら小気味よさげに笑った。
独り言をつぶやき続けるデスの事を、周りの神は怪訝そうに見つめていた。

■人間界〈長谷見昇…ハセミノボル〉

長谷見昇はまだ年端も行かぬ子供だった。だから、そんな彼の元に死神からのプレゼントが届いたのは酷く不幸だったと言わざるを得ない。彼は初めのうちは銃を振り回して遊んでいたのだが、それにも飽きた時、彼はなんと銃弾の装填を試みたのだ。……こういう時の偶然とは重なるものである。スロット部分に弾はするりと滑りこみ、そして長谷見昇は、引き金を引いた。『目標を強く念じること』をせぬまま。

天上では鉄の火、と呼ばれるその武器は、何の音もあげずに、これからの未来が拓こうとしていた幼い命を、冷たく散らした。

〔現在死亡人数…二人〕

■天上界

長谷見昇が死んだ後の人間界では、その両親が血相を変えて大騒ぎしていたが、デスはつまらなそうにそれを眺めていた。
帰って来た二発目の弾丸を見てぼそりと呟く。

「はえーよ」

■人間界（伊織博正：イオリヒロマサ）

どうして俺はこうついて無いただろう。その事を彼は常に考え続けてきた。『運のつき』というものからはほとんど対極にある彼は、くじ引きの懸賞でハワイ旅行なんでものを当てた時には明日にでも地球に突然隕石が降り注ぐんじゃないか、なんて事をきぐしていたのだが、そんなスケールの大きなことは起こらず、代わりに、といつてはおかしいのだろうか、ハワイ行きの飛行機が真つ二つにへし折れ、そのまま海に墜落した。氣付いた時には彼は（恐らくではあるが）人類未踏の島に流れ着いていた。自分が倒れていた砂浜を見渡す。すると視界の端に留まる物があつた。

「箱……か？」

ただの箱だ。頭では理解していたのだが、不思議とその箱に引き付けられた。ふらふらと箱に近寄り中身を見て、手紙を読む。その後彼はその箱を蹴り飛ばした。箱は海へ転がっていき、そのまま波に揺られていった。

「くそっ、どこのガキだ！人に期待させるだけさせておいて、中身はおもちゃの銃と、その説明書かよ！」

大きく音を立てて舌打ちし、彼は鬱蒼と茂る森の中へと姿を消した。やはりこの世に神なんざいない。

■天上界

「こつちにはいますよー」

デスは伊織に向つて手を振った。

■人間界（戸塚葵……トツカアオイ）

憎い。憎い憎い憎い憎い。あいつらが憎い。『憎しみ』とはどういう感情なのか、分かった気がする。……これは、炎だ。胸の奥から私自身を喰らおうとする炎。何とかして、この炎を消さないと、私は自分で自分を殺してしまうだろう。そんなことは絶対してはならない。自殺なんてしても、あいつらの心には何も響かない。むしろ、腹の中では私の事を蔑み、嘲笑うのだろう。戸塚葵はその容姿端麗とは全くかけ離れた容姿から、小学校、中学校と、陰湿ないじめをクラスメイトから受けていた。運の悪い事に彼女は自分をいじめるグループのリーダーとクラスが毎年同じで、しかしそのリーダーに付き添いいじめに加担する者は、いつも同じとは限らないのだった。こうして葵は最終的に学年全体からいじめを受けることになってしまったのである。

そんな辛い日々を耐えてきた彼女の元に、死神からプレゼントが届いたのは、ある意味とても幸運だったのだろう。

葵はいつの間にか部屋の隅に置いてあった黒い箱の中身を見て、沢山の感情を大きく体で表現した。初めは疑わしげに首を傾げ、次に伊織同様箱を蹴飛ばし、次に誰がこんな物を持って来たのだと恐怖し、次にベッドに飛び込んで思考し、最後には勢い勇んで銃を構えていた。そして予てから憎しみを抱いていた者達の顔を、深く深く脳裏に浮かび上がらせた。そして現在三度放たれた無音の銃弾は、他の時と同様、目標とされた者の命をいともたやすく奪い去った。

葵はしばらくその場で身動きしなかったが、本当に銃の性能が手紙の内容通りなのかどうか、目標としたいじめのリーダーの家に電話をかけて確認をとった。何回か、非常に長いコールを経て取られた受話器から聞こえる人物（母親だろう）の声は明らかに震えており、何かが起きたことは明白だった。何かが起きれば十分だった。何か、あいつを不幸にする何かが。間違い電話でした、とだけ短く伝え、葵は電話を切った。

なぜかしら、涙が零れた。拭いても拭いても止まらなかった。おかしいな、なんでかな。本当は喜ぶべきなのに。

それは、人の命を奪ったことへの後悔の涙か、それともためらいなく人を殺した自分への、哀しみの涙か。

【現在死亡人数：三人】

■天上界

「お、帰って来た帰って来た。今回みたいな使い方が一番ポピュラー……っていうんだっけか、まあ普通だよな。……相手をぶっ殺してから泣いてたけど。他の二人はなんだったんだよ。女の方はなんだかイカれた奴だったし、男の方は自爆してたし。ああ、やっぱ人間って面白いな。パターン多すぎだろ」

「ごしごしと血塗れた弾丸を拭き、デスは三つになった弾丸を手の中でじやらじやらと鳴らした。そこでふと、デスはある物を見て目を見開いた。「あらら、流されちまつてるよ、この箱。こいつか？ やったのは。俺はちゃんと浜辺に置いてやったのによー。人の好意を無駄にするなんてひでえ奴だな、おい。このまま待つのも癪だしなあ……銃弾の期限を早めちまおう」

そう言うデスは伊織の所に放った弾のタイムリミットを、『七日』から『現在の地上時間から十分後』に書き換えた。

■人間界（伊織博正：イオリヒロマサ）

島に着いてから四日程経った。彼はいまだにエネルギーに満ち溢れている。……こんな事を言うと彼が野蛮人であるかのようだが、彼はすでにこの環境に適応していた。その身に生まれ持った不運から、彼はこれまで様々な苦難（金持ちの息子と間違えられ誘拐されたり、たまたま足で蹴った小石が暴力団組員の車に直撃して追われたり等々）と戦ってきた。そのせいか彼の生きようとする力は人並み外れたものだった。

「これで、今日の食事は大丈夫だな。ふん、こんな所でも、一応は暮らしていけるもんだな。このまま何日か生活していきやあ、そのうち船が通るだろう。流れ着いたのが、食い物が豊富な島だったのがラッキーだったな」

そうして、ラッキーなどという、今までに数える程しか使ったことのない言葉を口にし、彼はほんの少し笑みを浮かべた。「お、ウサギじゃねーか。久しぶりの肉が食えるな」

森から不幸にも姿を現してしまったウサギを見て、伊織は舌なめずりをした。手製の銚のような物を掴み、彼は足に力を込めて立ち上がった。ウサギは再び隠れてしまっていたが、近くにいることさえ分かっていたら問題は無かった。

拠点としていた浜辺から森へ入る。先ほどのウサギは容易く見つかった。彼は全速力でそれを追う。……ウサギの逃げ足はすばしこかったが、数十秒もすると伊織がウサギを射程圏内に捉えた。銚を使い、ウサギを突く。銚はウサギの後ろ脚に命中し、ウサギはびくりと足を止めた。とどめを刺そうと再び銚を構えた時、伊織は激しい衝撃を頭部に感じ、吹っ飛ばされていた。

「うぐ、うぐあああ……。なんだ、今のは……」

そう言っただけで体を起こした伊織がみたのは、巨大なパンダだった。幻覚でも見ているのか、と伊織は首を振る。しかし頭の痛みは本物だ。血も出ている。恐らくこのパンダに殴られたのだろう。こんな所でパンダと出会うとは、彼は知っているのか、ついていないのか。

「くそ、やってくれたなあ、おい。……死ねよくそがああああ!!」

パンダに向かって銚を突きだすが、先ほどの痛みのためか、彼は足をふらつかせた。パンダは伊織の頭を無造作になぎ払う。無造作、というのは可愛らしい動きだったがつまり何の慈悲もないということと同じで、だから伊織は一撃で絶命した。

パンダは興味無さ気に伊織を見下ろしていたが、やがてのそのそと動物園で見せるような愛嬌のある動きをして去って行った。倒れていた伊織の死体の頭部を、デスの弾丸が粉々にしたのはその二分後の事だ。

〔現在死亡人数…四人〕

■天上来

「パンダ強ーよ、おい。もつと可愛らしく振舞えよ、おい。馬鹿力で爪振り回してんじやねーよ」

デスは自分がパンダに先を越された事に、少なからずプライドを傷付けられていた。

■人間界（早瀬守……ハヤセマモル）

銃を拾って六日がたった。今日がタイムリミット最終日である。早瀬はすでに目標を決めていたが、それを念じる、ということに困難を極めていた。なにしろ、この目で見ることがないのだから。

早瀬の標的は、『神』だった。彼はこれまで、あらゆる物事に対して出来る限りの努力をしてきた。陸上においても、勉強においても、何もかも。しかし、どんな時も常に上がっていた。天才、と呼ばれる者たちに、どうしてもあと一步で勝てなかった。彼は神を憎んだ。果てしないほど深く。自分に救いはおろか、むしろ絶望のみをあたえようとする神など、消えてしまえばいい。今手の中にある銃が、一体どれ程の力を持つのかは定か

ではないが、それでも彼は、『努力』をしてみようと思ったのだった。そう、自分に出来る限りの努力を。強く、意識する。顔など、必要無い。ただ、常に自分の前に壁を作りだしてきた憎き神の存在そのものを意識した。箱から銃弾を取り出す。落ちて着いて、誤って暴発でもさせようものなら、死ぬのはこちらだ。弾を銃のスロットに滑り込ませる。そして長い銃身を持った漆黒の銃を構える。……どこに？空に。少しでも、奴らが近くなるように。さあ――。

「死ね！！！！！！」
引き金を、引いた。

■天上界

「僕は死にませーん」

デスは飛んできた銃弾を、人間の間で言う『デコピン』で跳ね返した。

早瀬は自分の方に向かってきた弾丸を、ただただぼんやりと見つめていた。

「ああ、やっぱり駄目か」

意地でも挑戦を続けてきた彼らしくない科白を残し、早瀬守は最期を迎えた。

〔現在死亡人数…五人〕

■天上界

『リハビリ』終わり。さーてと、仕事、再開するかね。あーあ、増えまくった分減らさなきゃならねーのかあ。つたく、今度から服のポケットの数は半分くらいにするか」

デスは弾丸をポケットにしまい込み、けらけらと笑いながら手帳に人間の名を書きこみ始めた。

後にデスが調子に乗り過ぎ、地上の人間の数を二人にまで減らしてしまうのだが、それはまた別のお話。

天上の世界は、今日も平和そのものである。

あとがき

お読みいただきありがとうございます。当初予定していたよりも少し短くなってしまいました。本来であれば七人の人物について書きたかったのですが、あくまで『ランダム』な選出方法である以上、何人かはダブリが出てしまうのでは、と考え、同じような人物についての話は必要ないか、として七人↓五人と人物の数を減らさせて頂きました。時間が無かったのもあ r……いやいや。

内容の方なのですが、まあ、たった一回だけ使える最強の武器があったらどうするか、とか馬鹿馬鹿しいこと考えててできませんでした。無人島云々の下りはなかなか酷い出来ですが、スルーでお願いします。自分でももつとなんとかならなかつたのかと唸っています。

毎回（つつても二回だけですが）なんだかあとがき短いようなきがしますが、この辺で終わりにしたいと思えます。最後にもう一度、このような拙い文章を読んで頂き、誠にありがとうございます。

ボールが転がっているけど、僕は避けない。

坂道をボールが転がっているけど、僕は避けない。

坂道をボールが僕に向かって転がってきているけど、僕は避けない。

坂道を野球ボールが僕に向かって転がってきているけど、僕は避けない。

目の前の坂道を野球ボールが僕に向かって転がってきているけど、僕は避けない。

目の前の坂道を大玉転がしの大玉くらいの大きさがある野球ボールが僕に向かって転がってきているけど、僕は避けない。

目の前の急な坂道を大玉転がしの大玉くらいの大きさがある野球ボールが加速しながら僕に向かって転がってきているけど、僕は避けない。

目の前の急な坂道を大玉転がしの大玉くらいの大きさがある野球ボールが加速しながら僕に向かって僕のすぐ近くまで転がってきているけど、僕は避けない。

目の前の急な坂道を大玉転がしの大玉くらいの大きさがある野球ボールが加速しながら僕に向かって僕のすぐ近くまで転がってきているけど、それでも僕は避けない。

何かがひしゃげる音がしたけど、それでも僕は避けない。

空は青かったがこれは一般的に言うところの話で僕にとつてはちつとも青くはなかった。

梅の塩漬け、つまり一般的に言うところの「梅干」を二個一遍に食べて、二個一遍を略すとニコイチになるなど考えながら僕は道路という名の床の段差に躓いて転けた。そこから這い上がってスタンドアップ完了する頃には膝から赤い血潮が三センチメートルくらいの川を形成していた。重力加速度 g を考えるときつとこの摩擦係数は万分の三くらいなのかなと膝を観察しながら計算していると、視界が闇に覆われた。正確には影になった。僕の前方一メートル二十センチプラスマイナス十二センチの場所に僕の三割増くらいの身長の間が立っていた。

「やあ、減機会？」
それは誤字挨拶だった。

「減機会」

そのまま返してやった。実際暫く会っていなかったのだから間違っていない。そして踵を返してきつかり七歩を歩いたところで転けた。起き上がる頃にはきつかり七歩分の追い上げを見せ付けられ、またこの男は僕の後方一メートル二十センチプラスマイナス十二センチの位置にいた。

「全く、冷たいね」

「『全く』を使ったらきちんと否定語で締めてください。でないと全くつまらない」

「はっはっは。ほんとに君はそういうのが好きだね」

男は言葉だけ笑った。口の形さえ変えずに。この人間の名は確か馬頭鹿男という略すと馬鹿になるが馬鹿にならないくらい頭だけは良い人間であった。だからこそこんな芸当が出来るのだろう。僕でもはっはっはと言えば口が「は」の形になるというのに。

僕は無視して歩き出すと、後ろから「このーきあーのき」と歌が聞こえてきた。馬頭鹿男通称非馬鹿の喉からではなく、非馬鹿の衣囊から。

「おっと、呼び出しのようだ。じゃあね」

そう言い残すと男は去っていった。その速さは僕が一步踏み出す間に万歩分。きつと今日も一日一万歩のノルマ達成だろう。だから僕は言い残す。

「あなたはいつでも減稀代」

眼前の夕日は一般的には橙色などと表現する色であるが、僕は夕日色と呼ぶ。

落ちている手袋（左手用）を右手に嵌めると手袋が夕日色に輝いたので急いで投げ捨てると元に戻った。もう一度右手に嵌めるとやっぱり夕日色に輝いたからまた投げ捨てた。今度は左手に嵌めると何も起こらなかったがこれの意味するところは果たして何なのか僕にも母校にも棒鋼にもわからない。ぎっくり腰と椎間板ヘルニアは同値だと思いついて入っている人が多いと医者が嘆いているのを思い出したが、椎間板ヘルニアの正体を知らない僕には関係のない話だった。ついでに棒鋼で背中を殴られたからといって椎間板ヘルニアになるかというところでもないらしいと医者が自信ありげに語っていた。

夕日色よりも赤色に近い血潮が流れる。もちろん膝から。その川は十七センチメートルにまで成長していたからせつかなので先端から二センチメートルばかり指で掬って舐めてみると夕日の味ではなく棒鋼の味がしたけど僕は椎間板ヘルニアではない。棒鋼を想像してみると棒鋼のような形をした生物がいて、そしてそれとそっくりな人間が僕の真横に立っていやがった。

「何してるのさ」

現れたのは可愛い妹らしき人間だったが、僕の妹は可愛い以前に存在しない。

「血を舐めてるくらいならその血をもっと有効に活用したほうがいいんじゃないかな？」

「怪我の出血は献血屋さんも対象外だよ」

そう言いながら四センチメートル分の川を切り取って路地に血という文字を記す。そういえば血と言う文字は何となく籠に似ている。

「はい、絆創膏」

妹もどきを取り出した数は二個だった。一方は虹色、他方は無色。無色を挿んで膝に貼ると目視できなくなってしまうも通り抜けて赤い川が生成され続けていた。つまり無色は無職だったのだ。虹色を奪って膝に張ると今度は虹色の川が生成された。つまり虹色は無職だが本質的には無職だった。そして十二秒と七十三分の四秒を合算した時間ののち、剥がれた。有職が地に落ちたとき、妹もどきは破顔一笑のようににっこりと破顔した。だから僕は蟹歩きでその場を去りながら言い残す。

「膝と粘着剤をつけた医薬品の絆は切れたよ」

日没後の漆黒は漆と違って引っ掻いても剥がれてはくれない。

いかに効率よくペットボトルに水を入れるかを教授と競ったことがあった。年功序列の年功は年齢と功績の和というよりも現実には年齢だけを指しているように、年功序列教授は百二十八歳という点では誰にも負けなかったが、ペットボトル競争で僕は圧勝した。欠けた醤油差しには欠けた醤油差しという価値があるように、僕だって食事の前では手を洗う。教授の前では手を洗う。今朝の残り物の二分の一と昨日の残り物の四分の一と一昨日の残り物の八分の一と一昨昨日の残り物の十六分の一を食卓に並べたけど水を飲んだらおなかいっぱいごちそうさま。教授は確かこんなことを言っていた。

「私はこれから若返る。だからそのときまで君は生きて、若返った私と会ってはくれないだろうか」
 そう言った三十二時間後に教授は享年百二十八。

夕食という名前の夜水、ただし我田引水しないほうのやつを終えた僕は移動式食卓を焼却処分してから道という名の未来を歩いた。未知という名の路は過去という名の籠と接続されていた。駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人、そんな彼らが整数なら、世の中の人は実数で、僕は複素数だ。だから僕は電子辞書を電磁司書に預けて預けっぱなしで八ミリフィルムのバミりごとエラーを提供したせいでそれから暫く電磁司書は八面六臂で三面六臂の三分の八倍の働きを見せてくれたけどきつと可愛いはずらへっ☆

そんな中でも膝の川は天の川のような一年に一回しかでてこない「ち」の文字とは違って年中有休月刊擦過傷の「ち」が流れるからこそ痛々しくて見てられるけど身の毛が弥立つ間にまた十七センチメートルになっていたところを思い切って全部刈り取って路地の川に投げ捨ててから妹もどきが言っていた言葉を思い出して少しばかり後悔をする。どうやら僕は初心を忘れてしまったようだ。初心なんて元から無いけど。

いつのまにか握り締めていたポイントカードを引き千切ると中からポイントカードが現れてそれを引き千切るとまたポイントカードが現れたから諦めて踏みつけたら非馬鹿登場の瞬間を消し去ったと同時に二十ジュールのエネルギーを消費しながらエントロピーは現れては消えてゆく運命にあったらしいがそれに気付く前に僕の足は前に出て、きつと微かに言い残す。

「航海先に立たず、残り物役に立たず」

真つ白な空は闇にこそよく似合う。

鉄格子で焼肉焼いたらすり抜けて火傷したという体験談を実演する馬鹿が目の前にいる。

「おはようもしくはお久しぶり」

そんな訛語で訛語を喋る人が灯台行きの電車を留意してくれたから僕は灯台への道をひん曲げた。こんなことをする人を僕は一人しか知らない。

「おはようもしくはお久しぶりだからペットボトル競争でもう一回眠ってください」

「相変わらずだね君は」

「相変わらずですな教授も」

「どうだいこの若返った身体は」

「精神が若返っていないので意味無し」

享年百二十八が精神百二十八のまま生年十六くらいになって出現したからいつもの癖通称「腕三回転捻り」が仇となって教授は両肩同時に脱臼した瞬間骨違い肩から眩しさ到来、そして眼球と脳が正常に戻ると視界にいたのは芳紀八歳元氣少女ただし中身は百二十八。

「残念無念一昨昨年」

芳紀と言う表現に誤りがあったように、外中あわせて大外れ。

教授は教授でありながら何も教え授けることをしない竹刀のように置きっぱなしの放りっ放し、そんな人間人間枷^{ひとまかせ}。ところが何かやっていたらしいようでキョウジュ・ザ・セカンドは笑う。そして僕は左右に一歩踏み出して転けた。

「それも相変わらずだな」

「それが僕ですから」

「どうだい今日は楽しかったの会？」

「さっさと帰らないの会」

「自分らしくて何よりだな」

「他人らしくてもしょうがない」

教授は視野から即座に消滅した。それから僕は独りで歩きだす。新しき朝を求めたりしないで静かに待つ代わりに。

今日がもうすぐ終わる。日付が変わる前に布団と言う名の瓦礫に身を潜める。今日はこれきりもう来ない。だから僕が言い残す言葉は「おやすみなさい」ではなく、

「さようなら」